

バートランド・ラッセルの外部世界の認識論

三笠 俊哉*

『プリンキピア・マテマティカ』において、ラッセルは数学を論理学に還元することを試みた。その後、ラッセルの興味は外部世界の論理的構成へと向かった。その際、記述理論とタイプ理論といった論理学上の手法が重要な手段となった。外部世界についての知識は、見知りによる知識と記述による知識に分類されるが、ラッセルの認識論においては、記述による知識は結局見知りによる知識に還元される。そして、見知りによる知識を構成する感覚与件は論理的原子として、論理的な世界構成の素材となる。論理的原子としての感覚与件から、集合論的手法を用いながらさまざま対象を一種のクラスとして構成することで、世界を構成していくのである。ラッセルのプログラムは巧妙にも、感覚与件からなる私的空間をパースペクティブのクラスと同一視することで、空間の公的な性格も確保できるように考えられたものであった。このラッセルの試みは観念論や懐疑論に陥ることなく、物理的对象が存在するという私たちの信念と、所詮知識の基礎は知覚から得るしかないという、証拠と証拠から得られる知識の間のギャップに合理的な説明を与えた。また、ラッセルの事実の分析を言語の分析に基づかせるというアイデアは、言語の限界即世界の限界説として『論理哲学論考』のワイトゲンシュタインにも一部共有されているのである。

Key Words: 記述理論, タイプ理論, 世界の論理的構成, B.Russell

1 はじめに

『プリンキピア・マテマティカ』で、数学の論理学への還元という課題を一応成し遂げたラッセルは、次にここでの成果を認識論的課題へと応用しようと企てた。このころの興味関心の所在をラッセルは自伝で次のように語っている¹。

同じ時期に、というのは1910年から1914年にかけてであるが、私は物理的世界が

* 人間学部

何であるかということのみならず、われわれがいかにして物理的世界を知るにいたるかという問に興味をもちはじめた。

では、認識論的課題と『プリンキピア・マテマティカ』で成し遂げたことには一体どのような関係があったのだろうか。そこで、本稿では次のことを課題とする。ラッセルの論理学の成果である記述理論、タイプ理論がどのように彼の外部世界についての知識の問題と関係しているのかを明らかにすることを試みる²。

2 記述理論とタイプ理論

言語表現において、何らかのものを指示するように見えるものは「指示句 (denoting phrase)」と呼ばれる。例えば、日本語における指示句には、「ある人」「すべての人」「現在のイギリス王」「現在のフランス王」「太陽系の質量の中心」などが含まれる。これらはどのようなものを指示しているかによって3種類に分類できる²。

1. 指示句的ではあるが、いかなる対象をも指示していない (ex. 「現在のフランス王」)
2. 一個のある定まった対象を指示する (ex. 「現在のイギリス王」)
3. 不特定に指示する (ex. 「ある人」)

1と2は確定記述、3は不確定記述と呼ばれている。ここで、次のような命題を考えてみる。

- (a) 現在のフランス王は禿である。

この文は「 x は禿である」と、「現在のフランス王」という二つの部分からなっている主語-述語命題と分析できる。ここで問題となるのは、確定記述「現在のフランス王」である。これはタイプ1の指示句である。そもそも、言語において確定記述に期待される役割は、「鳩山由紀夫」や「Barack Hussein Obama, Jr」のような固有名と同じように、対象を指示することである。しかし、現在のフランスは共和国であり、「現在のフランス王」なる者はいない。このように、存在しない者を指示する確定記述を含む命題が有意味であるとするならば、そこから次のようにして不整合を導き出すことができる³。(a)が有意味な主語-述語命題であるとする。主語-述語命題が有意味であるのは、それがあつる個体を選び出し、それにある性質を帰属するときのみである。だが「現在のフランス王」なるものは存在しないのだから、(a)の主語は何も存在するものを選び出していない。したがって、(a)は有意味な命題の基準を満たしていないことになる。これは(a)は有意味であるという前提に反する。なので、(a)の主語は何かを選び出していないが、存在しない者を選び出すことはできない。

この困難を解決するために、ラッセルがとつた方法は、(a)を次の $(\alpha) \sim (\gamma)$ のように分析し直すことであつた。

- (α) 現在のフランス王が少なくとも一人存在する。
- (β) 現在のフランス王がたかだか一人存在する。
- (γ) 現在のフランス王はそれが誰であれ禿である。

最初の分析によれば、命題(a)は主語-述語命題と考えられていたので、述語記号 C と変数 x を用いて $C(x)$ という論理構造をしていると分析される。だが、新たな分析によれば、本当は $(\alpha) \sim (\gamma)$ までの命題はそれぞれ次のような構造していることになる。述語 $K(x)$ を「 x は現在のフランス王である」、述語 $B(x)$ を「 x は禿である」とすると、次のように記号化できる。

$$(\alpha') \exists x K(x)$$

$$(\beta') \exists x \forall y (K(y) \rightarrow y=x)$$

$$(\gamma') \forall x (K(x) \rightarrow B(x))$$

そして、命題(a)はこれら $(\alpha') \sim (\gamma')$ の連言であって、

$$\exists x (K(x) \wedge \forall y (K(y) \rightarrow y=x) \wedge \forall x (K(x) \rightarrow B(x)))$$

という論理構造をしていることになる。つまり、当初単純に思えた命題(a)の論理構造は、実はより複雑な量化の構造を省略したものと考えるべきなのである。

先の命題(a)を主語-述語命題だとする分析の不都合がどこにあったのかを思い出そう。命題(a)の主語である確定記述がある個体を選び出さなければならないにもかかわらず、その役目を果たすことができない、というのが問題なのであった。だが、新たな分析では、含まれる個体変数 x, y には、「現在のフランス王」のような特定の個体であるはずのものの存在への言及は一切入る必要はない。命題を構成する $(\alpha') \sim (\gamma')$ も一般的な命題なので、命題の真偽を考える際には、単に (α') の部分が偽になるので命題全体が偽になる。よってこの命題は無意味な命題ではなく、端的に偽な命題である。

次に、タイプ理論の概要をみてみることにしよう。タイプとは命題関数の有意味性の範囲 (the range of significance of a propositional function) として定義される⁴。ここでいう命題関数とは「 \sim は禿である」のように、その内部に空所を含んでおり、そこに項が入ると命題になるようなものである⁵。この命題関数の空所に入るものの種類によってさまざまなタイプを設定するのである。鳩山由紀夫やソクラテスなどの個体を0階のタイプとする。そして、1階のタイプの命題関数は、個体つまり0階のタイプの対象をその値とするような命題関数である。そして、2階のタイプは、1階のタイプまでの命題関数を空所の値とする命題関数である。つまり一般に $n+1$ 階のタイプの命題関数は n 階までの命題関数を空所の値として持つものとして定義できる。

命題関数のタイプから、その空所を埋めるもののクラスにもタイプの区別を導入することができる。0階のタイプは個体であり、1階のタイプのクラスは要素に0階のタイプの個体を含むようなクラス、2階のタイプのクラスは要素に1階のタイプのクラスを含むようなクラスで

ある⁶。このようなタイプ理論の目的は何であろうか。タイプ理論は、自分自身について述定する述語を禁止することで、パラドクスが出てこないようにするための工夫なのである。

次節以降では、こうした論理学の技術の認識論への応用を具体的にみることにする。

3 見知りによる知識と記述による知識

記述理論とタイプ理論によって、ラッセルは抽象的な対象の存在について、その種類を切りつめる具体的な方法を提示してみせた。元来、これらは論理学による数学の基礎づけという論理主義のプログラムを実現するためのものであったが、ラッセルはこの方法を外部世界についての知識に適用したのである。本節では、ラッセルの外部世界についての知識の分析をみることにしよう。

ラッセルによれば、一般に知識は「真理の知識」と「ものの知識」の二種類からなる⁷。真理の知識とは、「私たちが知ることは真である」というような判断にかかわる知識である⁸。論理法則などがこれにあたる。他方、外界の認識にとって基本的なのはものの知識である。おおかたの外界の実在についての知識はこれにあたる。このものの知識はさらに「見知りによる知識(knowledge of acquaintance)」と「記述による知識(knowledge of description)」の二種類に分類される。見知りによる知識とは、真理の知識より単純で、論理的には独立していなければならない。また記述による知識はその源泉・根拠として、ある種の真理の知識を含んでいる。

ここでいう「見知り(acquaintance)」という概念には独特の含みがある。ラッセルによれば、ある認識主体 S が対象 O を見知っているというのは、O が S に表象(present)されているということの意味する⁹。つまり、見知りとは、認識主体と対象の間に成立するある種の関係にはかならないのである。それも、この関係が成立するにあたっては、推論過程や真理の知識が存在することなく、認識主体がこの対象を直接的に知らなければならない。この条件を満たすような対象としてラッセルが真っ先に挙げているのは色や音などのような感覚与件である。人間と外界の接点となるのは、基本的には感覚器官しかないのであるから、外部世界の認識にとっては、見知りによる知識が基本的なものになるように思われる。さらにラッセルは感覚与件に加えて、かつて見聞きしたものなど個人的な過去に関する知識と、自分の心を内観することによって得られる知識を見知りによる知識に分類する。では、見知りによる知識と記述による知識とはどのような関係にあるのだろうか。

ラッセルは記述理論において、言語における指示表現、特に確定記述を含むものについて分析を与えた。前節で述べたように、確定記述の役割とは対象を指示することである。そこで、「記述によって知る」ということを、「ある特定の属性を持っている対象が一つあってそれ以上はないということを知る」と定義する¹⁰。そして、ラッセルは確定記述の認識論的役割について次の2つをあげる。

1. ある固有名を用いている人の考えを明確に表現しようとすれば、記述で置き換えなければならない¹¹.
2. 私たちの理解しうる命題は、いずれも私たちが見知っている諸要素からのみ構成されなければならない¹².

「ビスマルク」「鳩山由紀夫」などの固有名は、ある特定の対象に単純に代わるものとして使用されるものである。だがしかし、ラッセルによれば、通常の言語使用ではこのようなケースはほとんど見られない。「鳩山由紀夫」を例にとると、日本の第93代内閣総理大臣であり、民主党の代表であり、鳩山一郎の孫であり、等々というこの人に帰属されるであろう属性を知ることによって彼を知っている人がほとんどであろう。日本に生活をしている人であれば、実物の鳩山由紀夫を見る機会があるかもしれないので、もしかしたら直接「この人が鳩山由紀夫氏です」というような形でこの人を知る場合があるかもしれないが、もしアメリカ人が鳩山由紀夫を知っていたとしても、その人が直接鳩山由紀夫を紹介されることはまずないだろう。また、仮に直接、鳩山由紀夫を紹介されたとしても、彼が政治家であるとか、弟が政治家であるといったような、この人についての属性を知らなければ、そもそもこの人について何かを知っていることにはならない。実はこうした個人の属性を知るには、本人と面識があるか否かということとはほとんど関係がない。つまり、人間が鳩山由紀夫についてなんらかの判断をするためには、その材料となるのはさまざまな鳩山由紀夫についての属性を述べた記述の集まりなのである¹³。また、「ビスマルク」のような歴史上の人物の場合、この人を直接見知るということはあり得ない。結局、「ビスマルク」が何ものであるのかということは、19世紀に活躍したドイツ帝国宰相であるとか、鉄血宰相と呼ばれたとかというような記述によってのみ知ることができる。つまりラッセルによれば、一見固有名と思われるものであったとしても、それは確定記述の連言の省略と分析されるべきなのである。

では、固有名に仮装されたものも含む確定記述は見知っている要素から構成される、という第二の主張の意味することは何であろうか。ラッセルにしたがって、「私が、AがBを愛している、と判断する」という判断を例にとろう。これは「判断する」という述語を J として、 $J(\text{私}, A, B, \text{愛している})$ という四項述語 J として分析できる。そしてあるものが判断の要素であるとは、それが J の変項の値であることである。命題として「私が、AがBを愛している、と判断する」を理解するということは、それが $J(\text{私}, A, B, \text{愛している})$ のような構造をしている、ということを理解し、そしてさらに J の変項の値を知ることなのである。では、 J の変項の値が単純な対象で見知りによる知識に属するものであるなら問題ないが、それがさらに複合的なものであったならどうだろう。ラッセルの原則は適応できないのだろうか。ここで、記述理論が生きてくる。記述理論によれば、見かけの論理形式は必ずしも言語表現の正しい論理形式ではなく、実際はより複雑な量化表現であることがあり得る。だとすれば、 J の変項の値も、実際はより複雑な論理形式をしているかもしれないのである。次に、「ジュリアス・シーザーは暗殺された」

という判断を考えよう。固有名「ジュリアス・シーザー」は、先の「ビスマルク」と同様に歴史上の人物であり、私たちが直接見知ることにはできない。だが、これを「一人の、そしてただ一人しかいないある男はジュリアス・シーザーと呼ばれた、そしてその男は暗殺された」と分析すると、「ジュリアス・シーザー」を命題の要素と見なす必要はなく、命題の各要素を見知り可能な要素に還元することができるのである。

以上のラッセルのプログラムでは、外部世界についての知識はそのほとんどは記述による知識であるが、適切に分析を遂行することで結局は見知りによる知識に還元することができる。そして、その分析には記述理論で得られた成果が存分に用いられる。しかしここで一つ疑問が提起できる。見知りによる知識から構成された世界は、私たちが認識している世界と同じなのだろうか。感覚与件を初めとした見知りによる知識とは結局は個人的な感覚印象である。だとすれば、これは、私たちすべてに認識されるという意味では公的であり知覚されようがされまいが実在しているような世界とは別物なのではないか。次節では、この問題を解決するために、感覚与件から物理的対象の世界を論理的に構成するパースペクティブの理論を検討する。

4 世界の論理的構成

認識論における外界との接点を感覚与件に求めるラッセルにとって、私たちから独立している実在をどのようにして感覚与件から推論することができるのかということは、認識論上の重要な問題である。この問題に答えるためのラッセルの戦略は次のようなものである。まず、ラッセルは知覚作用とその対象を区別する。知覚作用は感覚から与えられるものであり、他方で知覚の対象のほうはセンシビリアと呼ばれる¹⁴。そして、ラッセルはセンシビリアを感覚与件と同じ形而上学的・物理的資格を持つものとして定義する。これは、「知覚の対象は知覚されなくても存続し続ける」ということを前提として受け入れることを意味する¹⁵。

しかし、ラッセルが受け入れたこの前提はやや強すぎるのではないだろうか、という疑問がわく。そもそも感覚与件は人間に直接与えられるものとして定義されていたはずである。したがって、それはあくまで主観的なものであるか、あるいは主観の入り交じったものである。センシビリアを主観的なものと思われる感覚与件と同じ形而上学的資格を持つものと定義しておきながら、その存在を前提してしまうのは早計ではないだろうか。これに対してラッセルに反論の用意がないわけではない。ラッセルは、感覚与件についてしばしば2つの問題が混同されている、と指摘する¹⁶。

1. 私たちがそれを感じていないとき、感覚的对象は持続しているか？
2. 感覚与件は精神的であるか、物的であるか？

1は、一見主観的な問題に見えるが、ラッセルによればこれはまったく物理学的な問題である。というのも、感覚与件でなくなった感覚的对象が持続するということは論理的に不可能なことではないし、また、もし感覚与件は持続しないという主張の根拠が経験的に確かめられた

因果的法則から推論されたものであるなら、それが物理学の対象でないはずがないのだから。また2について言えば、感覚与件は物理学で取り扱われるという意味で物的なものであり、ただ単に人間の主観に属するものではない。そもそも論理的に言えば、感覚与件は主体の存在に依存すらしていない。なぜなら、Aの存在が論理的にBの存在に依存するとは、BがAの部分であるとき、かつそのときに限られるからである。つまり、感覚与件が主体の存在に依存するとは「主体が存在するならば、それに感覚与件が存在する」という含意関係になっているということである。この場合、論理的には、前件が後件の部分でなければならない。よって、特定の感覚与件が与件でなくなった後に持続してはならない、とする理由はないことになる。

これについて、アーバインは、ラッセルは知覚されないセンシビリアの存在を前提しているが、実際に彼が示したのは、知覚されないセンシビリアの存在を否定する根拠はないということに過ぎない、と指摘している¹⁷。パースペクティブから空間を構成するというアイデアはラッセルの外部世界についての知識の中心に位置し、後述するようにパースペクティブはセンシビリアと密接に関係しているので、センシビリアの存在に疑いがあるということは、計画全体の達成が危うくなりかねない。しかし、ラッセルの論証が不完全であるのが確かであったとしても、ラッセルが『外部世界はいかにして知られうるか』で採用した「知覚の対象は、知覚されなくても存続し続ける」という前提はそれほど奇異なものではないと思われるのである¹⁸。

このラッセルの立場に立つなら、結局、すべての感覚与件はセンシビリアであることになる。そして、センシビリアが知覚されると感覚与件になる。このセンシビリアは世界を構成する最小単位である。そして、感覚与件は人間の外部世界の認識を分析していったときにたどり着く最小単位である。感覚与件に関するかぎり、それは私的世界のなかに存在する¹⁹。感覚与件を含む私的空間は、各知覚者によって異なっている。そこで、各知覚者によって異なっている私的空間から、より公共性のある空間を作らなければならないが、異なる私的空間同士は類似によって相関関係をもつものとして秩序づけることができる。

次にラッセルは、ある個人の視界として「パースペクティブ」という概念を導入する²⁰。そして宇宙内のすべての可能なパースペクティブのクラスを「パースペクティブの系」と定義する。これはすべての人のすべての可能なパースペクティブを含んでいる。また、ある個人のパースペクティブのクラスを「パースペクティブ空間」と呼ぶ。パースペクティブ空間も私的空間も、認識主体にとっての世界であると言う意味で同一の世界を表している。ある特定のパースペクティブを取り上げて、そこにある一つの対象が与えられたとする。すべてのパースペクティブの中から、その対象と相関関係をつけることができる対象の系を構成することで、「ある瞬間におけるもの」を定義することができる。そうすると、その「もの」の、パースペクティブ空間内での占める場所を考えることができる。この場所は私的空間内での場所と同じであるはずである。よって、パースペクティブ空間と私的空間の相関関係を与えることができるのである。また、パースペクティブの系は可能なパースペクティブ空間を含んでいる。そして異なるパースペクティブ空間同士の関係は、同一物の異なるパースペクティブにおける、異なる現象

のセンシビリアによって相関関係を与えることができる。

こうして、一方で感覚与件のクラスとして構成された世界と、他方個人のパースペクティブから構成された世界を互いに秩序立てて関係させることができる。このような世界をラッセルは仮説的世界像(hypothetical picture of the world)と呼ぶ²¹。これによって、感覚に関する事実も物理学などの科学的事実も両方解釈することができ、またこの世界像は事実にも適合しており、論理的矛盾もない世界を構成することができる。

このようなラッセルの外部世界の構成において、彼のタイプ理論を含む論理学の影響を見て取ることはたやすい²²。つまり、感覚与件を原子として、そこから高階のクラスを構成する要領で外界の対象をクラスとして構成していく、というのがラッセルの試みであったのである。クワインの言葉を借りるならば、ラッセルは「感覚与件、集合論、論理学の観点から外部世界についてのあらゆる言説の翻訳を与え」ようとしていたといえる²³。

5 結 語

これまでの議論を振り返っておこう。外部世界についての知識は、見知りによる知識と記述による知識に分類されるが、ラッセルの認識論においては、記述による知識は結局見知りによる知識に還元される。そして、見知りによる知識を構成する感覚与件は論理的原子として、論理的な世界構成の素材となる。ラッセルのプログラムは巧妙にも、感覚与件からなる私的空間をパースペクティブのクラスと同一視することで、空間の公的な性質も有することができるように考えられたものであった。

では、このラッセルの試みを私たちはどのように評価すべきだろうか。外部世界の認識についてのラッセルの試みの功績の一つは、観念論や懐疑論に陥ることなく、物理的対象が存在するという私たちの信念と、所詮知識の基礎は知覚から得るしかないという、証拠と証拠から得られる知識の間のギャップに合理的な説明を与えたことであろう。また、この頃のラッセルの事実の分析を言語の分析に基づかせるというアイディアは、言語の限界即世界の限界説として『論理哲学論考』のワイトゲンシュタインにも一部共有されているのである²⁴。

注

¹ Russell (1959) 邦訳 11 頁。

² Russell (1956c) pp.41-45.

³ ここでは、ライカンによる議論をもとに見てみることにする。Lycan (1999) pp.16-19, 邦訳 17-26 頁。

⁴ Russell (1956b) p.75.

⁵ Russell (1956b) p.75, 飯田隆 (2007) p.236.

⁶ ラッセル自身は 0 階のタイプに置く「個体」をどのようなものとするかについて例をあげてはおらず、もっとも低いタイプに何をとりかは文脈に依存するのであり、タイプの別は相対的なものであると述べている。Russell (1956b) p.76.

- ⁷ Russell (1912) p.23.
⁸ Russell (1912) p.23.
⁹ Russell (2007) pp.209-210.
¹⁰ Russell (2007) pp.214-215.
¹¹ Russell (2007) p.216.
¹² Russell (2007) p.218.
¹³ Russell (2007) p.216.
¹⁴ Russell (1914) p.88, Irvine (1984) pp.335-336.
¹⁵ Russell (1914) p.88, Russell (2007) pp.148-149.
¹⁶ Russell (2007) pp.151-152.
¹⁷ Irvine (1984) pp.338-345.
¹⁸ Russell (1914) p.91.
¹⁹ Russell (1914) p.159.
²⁰ Russell (1914) p.94.
²¹ Russell (1914) p.100.
²² Quine (1981a) pp.84-85.
²³ Quine (1981a) pp.84-85.
²⁴ Wittgenstein (1981) 4.12.

引用文献

- 飯田隆 (責任編集) (2007). 哲学の歴史第 11 巻論理・数学・言語 中央公論社.
 Irvien, W.B.(1984).Russell's Construction of Space from Perspective. *Synthese*, 60, pp.333-347.
 Lycan, W.(1999).*Philosophy of Language*. London: Routledge.
 (荒磯敏文, 川口由起子, 鈴木生郎, 峯島宏次(訳) (2005). 言語哲学入門 勁草書房)
 Quine, W. V. (1981a).Russell's Ontological Development. In *Theories and Things.*: Harverd University Press.,
 Chap.8 pp.73-85.
 Quine, W. V. (1981b).*Theories and Things*. Cambridge Massachusetts: Harverd University Press.
 Russell, B. (1912).*The Problems of Philosophy*. Oxford: Oxford University Press.
 (高村夏輝 (訳) (2005). 哲学入門 筑摩書房)
 Russell, B. (1914).*Our Knowledge of the External World*. London: Routledge.
 (石本新 (訳) 外部世界はいかにして知られうるか 山元一郎 (責任編集) (1977). 世界の名著 58 中央
 公論社 pp.81-304)
 Russell, B.(1956a).*Logic and Knowledge*. London: Routledge.
 Russell, B.(1956b).Mathematical Logic as Based on the Theory of Types. In *Logic and Knowledge*. : Routledge.
 pp.57-102.
 Russell, B.(1956c).On Denoting. In *Logic and Knowledge*. : Routledge. pp.39-56.
 (清水義夫 (訳) 指示について 坂本百大 (編). 現代哲学基本論文集I 勁草書房 pp.45-78)
 Russell, B.(1959).*My Philosophical Development*. London: George Allen and Unwin.
 (野田又夫 (訳) (1980). 私の哲学の発展 みすず書房)
 Russell, B.(2007).*Mysticism and Logic and Other Essays.*: Pierides Press.
 (江森巳之助 (訳) (1995). 神秘主義と論理 みすず書房)

バートランド・ラッセルの外部世界の認識論 (三笠俊哉)

Wittgenstein, L. (1981). *Tractatus Logico-Philosophicus*. London: Routledge.

(野矢茂樹 (訳) (2003). 論理哲学論考 岩波書店)

(2009.10.7 受稿, 2009.11.4 受理)